追憶。
「歩け、歩け」で得た体験記

その１

koberyo1

時は昭和１２年、わたしは小学校の４年生だった。当時の先生の指導のもと（Ｔ先生といった）、書初めを上野で開催していた展覧会に出品するようになった。
出品してからは審査が良かったものだから、ずいぶんと励まされた記憶がある。それで気分を良くし、頑張って毎年、書初めの公募に出すようになった。
展覧会の正式名称は、「全国児童書方（かきかた）展覧会」といった。最初に出品した年は、「特選乙賞」をいただいた。次年度は「新興日本書道会」に出し、三等を受賞した。これは少々レベルが高く、いわば大人むけの賞だったと思う。実際、ひどく懲りた。なので、翌々年の昭和１４年からは、やはり児童が対象の「全国児童書初展覧会」にチャレンジし、佳作賞を頂戴することができた。
東京は上野の会場に先生と一緒に見に行ったわけだが、あらかじめ受賞のしらせが郵送されてくるわけではない。直接、会場でたしかめるしか確認の術はないのだ。自分の作品にいかなる賞が授与されているか、はたまた落選の憂き目にあっているか、行ってみるまではわからない。試験の合否をたしかめるようなドキドキ感があった。会場にゆく前の夜など期待がふくらみにふくらんで、なかなか寝付けないことがあった。
書初めの出品であるが、準備はなかなかに大変で、骨が折れた。毎年、筆を買ったり、出品用の和紙を大量に揃えるため、新宿の「甲州屋」（書道の用具を売る店）にまで自分で歩いていった。それもこの当時、日本と「チャイナ」（今のような中国という国はなかった）との戦争がはじまり、陸軍が大陸に戦線を拡大していった頃でもある。

ここから書初めの話は終わり、「歩く」話となる。
戦争が長引くにつれ、物資が不足するのをじわじわと感じはじめるようになった。この頃より国は、「贅沢は敵だ！」とか、女性のパーマネントの禁止とかも声高に叫ぶようになった。わたしの脳裏の片隅にいまもなお残るのは、母などは「パーマネントは値段が高いから」と言って止めたし、モンペスタイル一辺倒になった。
この頃、――昭和１５年のことだが、神武天皇が即位してから皇紀２６００年と称して大々的な祝賀会がもよおされ、大いにムードを盛り上げたが、「シナ事変」の進行につれ、日本をめぐる緊迫感はますます悪化の一途をたどっていった。このような社会情勢の折である。贅沢は敵だったし、ともかく「歩け、歩け」のスルーガンが持て囃されるようになり、もはや生活の一部にもなった。だから自宅のある幡ヶ谷から新宿まで子どもだったわたしは歩きに歩いたのである。

では、どんなふうに歩いていったのか？
幡ヶ谷の自宅から西方の淀屋橋方面に向かう途中、「十二社（じゅうにそう）」まで出て、「小西六写真淀橋工場」前から熊野神社を右にまがり、「淀橋浄水場（東京人の飲み水はここで浄化されていた）にそった長い長い何の変哲も感じない横道を、そのまま新宿まで歩いた。
現在、新宿副都心と称して東京都庁が神田から引っ越してきているが、当時、新宿に都庁はなかった。そこはかつては浄水場だったからだ。いまは西新宿の新宿副都心と呼ばれる「淀橋浄水場」だが、奥多摩の羽村水源地から明治の頃より水を送ってきた歴史ある浄水場であった。

「淀橋浄水場」にそったこの道は、新宿に映画を見にいくときもつかった。自宅から徒歩で時間にして約六十分の距離である。その頃は何もない、がらんとした場所だったが、いまは高層マンションやビルが乱立している。東京の発展は、わたしが子どもだった時から考えると、これだけでも急速な繁栄ぶりがうかがえる。まさに「スサマジイ」の一語に尽きる。
この「歩け、歩け」の習慣によって自宅からの徒歩旅行は「明治神宮」にまで及んだ。明治神宮まで幡ヶ谷から約四十分の道のりであった。

明治神宮までのルートは、以下のように歩いた。
自宅から南へ南へと歩く。そして「上水道堤」から甲州街道を縦断して京王電車の「初台駅」に出る。さらに南へとゆけば、小田急電車の「参宮橋駅」を経由し、さらに歩きやすい道となる。そこはもう代々木であった。
代々木練兵場といえば、陸軍の兵隊さんを訓練するところと聞いてはいたが、兵隊さんの姿を見ることは一度もなかった。その頃、陸軍の兵隊さんは中国大陸へと行ってしまったのだろうか？ここは兵隊さんどころか、子どもたちの恰好の遊び場と化してしまっていた。広々とし、管理がゆきとどいてないように思われた。塹壕の跡だろうか。あちこちに残っていて子どもが「かくれんぼ」するのにうってつけの場所になっていた。戦後は芝生を敷き、進駐軍のモダンでハイソな住宅が建ったところである。
当時、この荒地のとなりが「明治神宮の森」だった。大都会の東京に原生林もかくや、とばかりの蒼古とした森が息づいていたのである。そこでは早稲田実業に入学してからだが、野鳥観察や「探鳥」の楽しみを知ることになる。

さて当時の」明治神宮」へはどう行ったか、記憶を探りながら書いてみようと思う。
小田急電車の「参宮橋駅」、すなわち代々木からは神宮入り口は裏の入り口であって、「原宿」方面こそが正式な入り口となる。
いま思えば、子ども時代のわたしは「裏口」から神宮にお参りしていたことになる。裏口とは言えど、もちろん参道はひろいし、玉砂利は過不足なく敷き詰められてある。
蒼古の森、と先に書いたが、先日のNHKのスペシャル番組『明治神宮』にあったように、その歴史は意外にもあたらしい。大正９年に明治神宮は創建されたのだった。神宮には、明治天皇とその妃であった昭憲皇太后が祀られている。

わたしは少年時代、『明治神宮の鳥』と題した作文を書いたことがある。それは昭和18年ごろのことで、早実の漢文の授業だったろうと思う。先生は、和服に袴をつけた「竹之内謙六」先生だった。求められた作文のテーマは、『自分の好きなこと』であった。それで野鳥を観察するのが好きだったし、さかんに歩いたし、『明治神宮の鳥』を書いたのだった。
内容の詳細は忘れたが、いま思い出されるのは「カラス」のことだった。二十メートルもある樹々の一番高いところ、樹冠というのだと思うが、そこに「カラス」が小枝を集め、巣をつくっていたのだった。その巣の中から、カァ、カァと啼く声がうるさく降ってくるので、カラスの赤ち

ゃんが生まれたことがわかった。そのようなことを作文に書いたのである。
　それから作文とはべつだが、記憶にあるのは「キジ」だ。キジが参道をのそのそと歩いていたのでビックリしたことがある。昔話の「桃太郎」で鬼退治のお供をする鳥で、日本人には馴染みが深いと思われる。というのも人里ちかく耕作地にをこのんで生活する鳥だからだ。夜は林のなかの繁みにいて日中は昆虫を食べるという。
　だが、いくら人の近くに住む鳥とはいえ、明治神宮があるのは大都会だ。だからキジと遭遇する体験は驚きだったのである。

　そのほか、明治神宮では、ここに書ききれないほどの色々な体験をした。
　明治神宮について別のエピソードも書きたいが、今回は記憶に鮮明にのこる野鳥の思い出について書いた。